

Title	田中惣五郎著 日本ファシズム史
Sub Title	A history of fascism in Japan, by S. Tanaka
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.4 (1961. 4) ,p.339(89)- 343(93)
JaLC DOI	10.14991/001.19610401-0084
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610401-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二人は彼が庭で堆肥をつくることに同意した。ただしそれ以上のことは要求しないという条件を付してであった。サヴィニャは後退し、二人がヴァランヌの土地に大きな力を振うにいたったのであった。

二人はこの仕事で相当の儲けを挙げることができた。存分に手腕を振い、従って思ひ残すこともないほどであった。そんな時にマラン夫人が釈放された。

三

一七九五年に夫人は釈放された。彼女は二人に対し即刻に財産を返却するよう要求した。二人は容易にこれに応じてくれた。十分な利を得ていたのでこの二人は別に未練を感じなかった。二人は夫人の出所で仕事を続けることを断念した。

この時期までに没収財産の賃貸借の形式は変っていた。賃貸料は現物ということになった。マラン家のメテリについては穀物で一、〇八〇ボワソーと規定されていた。黒麦三、小麦一の割合で支払う。ほかに乾草五、〇〇〇が要求された。この方式は無一文のマラン夫人には応じ易いものであった。現物で支払うということは何よりも魅力であった。加えてそう重い負担とも思えなかった。彼女はすぐにでも契約しようかと考えた。

実際に彼女はその気になった。そして屋敷を檢分に出掛けた。かつて彼女はそこに住んでいた。屋敷は彼女の留守中に荒廢してしま

っていた。壁は落ち、屋根は破れて跡形もなかった。彼女はサヴィニャに修理を続けさせようかと思った。

一巡して彼女は引受けても見込みのないことに気づいた。彼女は入札を断念した。重要なことはそれが自由意志に発したということである。しかしもし彼女に労働を厭う気持がなく、金銭があれば、入札したかも知れなかった。

四

最後に。サヴィニャはどうなったか。一八〇二年に彼はエキュで宿屋を経営している。この宿屋は以前にクレルテが経営していたものであった。叔父と二人でマラン夫人の財産を引受けたクレルテである。彼はこれを借りていた。しかしサヴィニャはそれを家主カルロから二、五〇〇フランで買取っていた。

これほどの大金をサヴィニャはどこから得たか。他から借りた記録はない。しかし彼の本業の野菜作りで儲けたとは思えない。とすれば賃貸借に関係したということからであろうか。それに関係していたということでは損ばしていない。その辺のところに彼の大金の出所があったのかも知れない。

彼は宿屋の仕事で大して儲けなかった。一八〇六年には死んでいる。未亡人が夫の跡を引受けた。彼女はどちらかといえば儲けたようである。息子もまた父の仕事を継いだ。彼については一八四九年に記録がある。

田中惣五郎著

『日本ファシズム史』

白井厚

一

敗戦によって「天皇制とファシズムはやせおとろえてゆく」(本書三二頁) かに見えたにもかかわらず、戦後一五年を経て、天皇制は新しい粧いをもって進出し、ファシズムは浅沼・嶋中事件として、再びその醜い刃を露骨に現わした。人々の眼は、ともすれば行動右翼のテロにのみ集まりがちであるけれども、実はその背後には、その四倍に達するといわれる組織右翼、これらと結ぶ警察権力、保守党勢力、あらゆる機会を利用して国民の権力を狭めようと躍起となっている国家権力自体のファシズム化があり、安保体制と共に強化される軍備の増大がある。かつてテロの激発にもなう肅軍を口実として、テロリズムのエネルギーを踏み台に上からの軍国主義体制が強化され、言論弾圧から帝国主義戦争へと進んだ道の記憶はまだあまりにも生々しい。この不幸な失敗を繰り返さないためには、われわれは過去の病根に対する徹底的な分析から出発せねばならない。長年日本ファシズム史の研究に従事され、「北一輝」など独自の研究を進められてきた田中惣五郎氏が、「かくありき、と

書評

いうことへの反省とならんで、ふたたびかくあることへの自戒のために」(はしがき) 本書を書かれたのは、まことに時宜に適したところである。この方面の研究を一層前進させるために、以下にこの書についていくつかの問題を考察しよう。

二

先ず著者の日本ファシズム論の、基本的な骨組を追ってみよう。著者によれば、

「ファシズムとは、資本主義社会が、没落の断崖に立ったときこころみる独裁の一つの形態である。」(三頁)

「もし帝国主義を、国際侵略に重点をおく(国際侵略のばあいにも多少とも国内抑圧ともなうが)ものとしたら、ファシズムは国内弾圧プラス国際侵略の二重行為を併行的におこなうものである。」(四頁)

そして「日本のファシズムは『天皇制ファシズム』と名づけられ、」「日本の天皇は絶対主義プラスアルファの権威をもつ」「二重の絶対主義王」と規定される。「日本のファシズムはこの歴史へ回帰する形で、うしろむきに展開した」(六頁)。この天皇制絶対主義の根幹が「軍閥(のちの軍部)と官僚(のちの新官僚にまで続く)」「(八頁)であり、「ブルジョアジーが軍部を征服しえたと感じた段階でも、天皇制絶対主義の機構は依然として存在しつづけた」。すなわち「(1)内閣任命の実力をもつ元老。(2)天皇の意志を左右するに力

あるところの内大臣府。(3)統帥権と称する内閣のいかんともしがた
い天皇直属の軍事権をもつ軍部。(4)重要政策を天皇の諮詢によって
答えることで、内閣を倒しうる枢密院。(5)国民と絶縁した特権をも
つ貴族院。その他が政治機構として存続した」(二二頁)。この絶
対主義機構を思想化し倫理化したものが、軍人勅諭、教育勅諭であ
って、「日本のファシズムは、この絶対主義的機構と、とくにこの
絶対主義的考え方(もし思想といいかねるとしたら)を手がかり
に、さらにこれに支えられて進展したといえる」。その方法は、し
だいに復古する形態をとることによって。「すこし機械的な見方
はあるが、天皇は明治初年の専制段階にまで引きもどされ、政治機
構としてはまだ議会があるかなしかの段階、すなわち明治二十年
代にふさわしく、経済的には資本家、地主は(労働者、農民も)軍閥
官僚による助成期の明治初年から明治十年代へ、そして思想的には
軍人勅諭的、教育勅諭的なものの発生した時期にまでひきもどされ
たといっても、それほど独断ではなからう」(一二頁)。「下手にヒ
ットラーまがいの北一輝的なものが出現すれば銃殺されて、より天
皇がかがやくし、なまじいにナチ的機構が模倣されて、大政翼賛会
などが設置されれば、天皇制機構の下請的機構に顛落して、天皇制
機構をより強固にする結果となるのである。ここに天皇制ファシズ
ムの独自性が存在する」(二三頁)。

以上によって明らかのように、田中氏は日本のファシズムを天皇
制ファシズムとして、絶対主義機構に復古したものとして把握され

る。もちろんそのような面は日本型ファシズムの著しい特徴ではあ
るとはいえ、ファシズムは資本主義没落の段階における独裁形態と
すでに規定されていた。戦前戦中における日本の軍国主義が、ファ
シズムであるとすれば、絶対主義的な機構を残していたとしても、
絶対主義とは明らかに段階を異にするはずであるし、明治初年まで
引きもどされたように見えても、そこには国家独占資本主義の新し
い論理が貫徹するはずである。氏はこの段階の相違をどのように考
えているのか?

そこで氏のファシズムの段階論を図式化してみると、次のように
なる。

ファシズム前史(昭和二年—五年)

田中内閣の共産党弾圧と中国への侵略、浜口内閣の財閥による
独占金融資本の独裁化。

第一期(昭和六年—十二年)

三月事変、満洲事変、十月事件、五・一五事件、二・二六事
件、日独防共協定。

第二期(昭和十二年—十五年)

北支事変、日支事変、国家総動員法、大政翼賛会、日独伊三国
同盟。

第三期(昭和十六年—二十年)

米英への宣戦布告、東条内閣、敗戦。

これは丸山真男氏による時代区分(大正八年—昭和五年、準備期。

昭和六年—十一年、成熟期。昭和十一年—二十年、完成期)とは幾
分相違している、本書はこの区分に従って構成されており、それぞ
れの時期の特徴は、

第一期 非ファシズム的な「人間」の排除に終始。

第二期 主として法規的、機構的なファシズム化。

第三期 人間・法規・機構のすべてを濫用して、あくなきファシ
ズム政策を行う。

と説明されている(一四頁)。第一期がテロリズムの時代であるの
は明らかであるけれども、人間と機構とをこのようにはっきり時代
によって分けることができるかどうか、例えば第一期においても、
重要産業統制法(六年)、米穀統制法、日本製鉄会社法(八年)、司法
省に思想検事を設置、文部省学生部を思想局に再組織(九年)、北
満金鉱会社設立、日満経済共同委員会設立(一〇年)、軍部大臣現
役復活、不穩文書臨時取締法、思想犯保護観察法、言論・出版・
集会・結社等臨時取締法制定、米穀自治管理法、重要肥料業統制
法、自動車製造業法等の公布(一一年)などの「法規的、機構的な
ファシズム化」が着々と進み、逆に第二期において、矢内原事件、
人民戦線事件(一二年)、第二次人民戦線事件、河合事件、唯研事
件(一三年)、津田事件(一五年)その他「非ファシズム的な「人
間」の排除」が激しく行われた。区分にはそれぞれ一長一短がある
とはいえ、丸山流の運動の担い手による説明の方が、より本質的に
思われる。

いずれにせよこのような段階を経て、氏によれば、なしくずし
的にファシズムに推移していった。「このなしくずしのファシズ
ムは、天皇制絶対主義が、明治四年(一八七二)から昭和二十年
(一九四五)までの間に、なしくずしに消滅したのといささか相似
たる推移であるといえようか」(一四頁)と述べられているから、
天皇制絶対主義は明治から敗戦までの間に「なしくずし」に消滅し、
その逆にファシズムの方は漸増して東条内閣に至って完成したとい
うことになる。これは絶対主義からファシズムへの日本的移行形態
についての一見識であろう。だがこれは、絶対主義的なものに復古
する形態をとってうしろ向きにファシズムが展開されたという先の
説明と衝突することになる。一方から云えば、東条内閣において天
皇制絶対主義は消滅しており、他方から云えば、政治機構も思想も
資本家も明治初年の専制段階にまで引きもどされた。これは論理の
混乱であろうか。それともこのような矛盾をもって表現しなければ
ならないほど、日本のファシズムは複雑怪奇というべきか?

三

次にこのようなファシズムの担い手について考察しよう。

ファシズムは、本質的には資本家の赤裸々な独裁形態であるが、
日本では特にこの形成に大きな役割を果たしたのは軍人である。これ
については、先ず「この政商的資本家と、寄生地主の助成をこころ
みた天皇制絶対主義政府は、そのために、絶対主義の根幹である軍

閥(のちの軍部)と官僚(のちの新官僚にまでつく)を一つの階級のごとくに定着させた。」という説明が与えられている。つまり軍閥・官僚の本質は「封建制を維持しようとしながらも資本主義発展をこいねがうという二面の立場をもつ」(八頁)ことであり、「これに助成されながら資本主義的發展をこころみようとする資本家(地主も)との合作で、日本の資本主義は発展していった。時には二つの階級のごとく、ときには一つの階級のごとくにふるまいながら」(九頁)、ということになる。だがもちろん、軍閥・官僚は独立した階級ではなく、はじめから既知数として扱うことはできない。どの階級のどのような分子であるかを先ず追求することが必要である。

ファシズムの段階に入ってからでは、「第一次大戦後の軍閥は、すでに近代的な軍部として若干変質しはじめたのではないか」(二七頁)、「封建的な軍閥の半封建的軍部化」(二八頁)というように、軍閥と軍部が巧みに使い分けられていることに注意。つまり軍閥は絶対主義につながり、軍部という場合には近代的、ブルジョア的な性格を示す。だから「青年将校とは、その半身を天皇の軍隊として、天皇に忠節をつくすを本分とする身分であると同時に、他の半身を国民の軍隊として、資本主義の発展をこいねがう立場に立つところの過渡的存在であったといえはしないか」(二八頁)と考えられている。「天皇の軍隊としては、階級対立と政党の分立を統一し、国民の軍隊としては、国民と手をとって、海外発展による日本資本

主義の隆昌を目ざしたのである。この時、中国における軍事革命に参加した経験を持つファシストの首領北一輝が、すでにみたとき『日本国家改造法案』(日本改造法案大綱?—白井)をかざして、青年将校と提携し、指導しようとはかっていたのである。これが日本のファシズムの出発点であったといえる。」(二九頁)。ここでは、ブルジョアジーと国民が等置され、青年将校—北一輝の線は、海外市場獲得による日本資本主義の隆昌を目標としたというブルジョア性によって主に規定されている。

だが、北思想のコースは、「上を抑え下を引き上げる中間層中心」(二七頁)のものであった。軍部の中においても、上層は政党と妥協し、青年将校は中間層的(五〇頁)であった。一夕会(壮年将校、桜会(陸大的特権的立場)、小桜会(尉官級)などを通じて、「軍部は、上へ行くほど国内変革より国際侵略を主眼し、最上層部は戦争一本で満足する」(六三頁)し、統制派は国際侵略を、皇道派は、天皇帰一をさげんで国内改革を実現しようとしていると説明される(一〇三頁)。元来が「中間層は、階級的刺激がすくないために、忠孝的、国権的、排外的な考え方から容易に脱出しえない。その点、資本に国境なしとする資本家は、より国際的であったといえる。各国のファシスト、とくに日本のファシストが中間層を出発点とし、ファシズム段階を通じて、もっとも活躍の中心となりえたのは、この考え方に固着して、迷いなき生き方をしたためであろう」(一二頁)。するとここでは、ファシズム運動の担い手は中間層とい

うことになる。だからこそ、軍部ファシストの立上りのスローガンは、元老(当時はすでにブルジョア化した)・重臣・財閥・政党、さらに「軍閥」(ブルジョア化した軍人の意)という「主としてブルジョア的なものを正面の敵とした」(四五頁)ことがうなずけよう。ここではファシスト—中間層論的な色彩が強い。

日本のファシズムについてみた場合、この両者の説明はそれぞれ真理を含むであろう。だがこの二つが並列放置されれば、やはり論理の混乱となる。北の銃殺は、はじめは絶対主義機構に對立する「ヒットラーまがい」から説明されたが、ここではブルジョア的なものに敵対している。これらを有機的に把握するためには、「中間層」で分析をとどめるべきでなく(中間層という均質な集団は存在しない)、さらにその内部に立ち入った考察を必要とする。そのためには、絶対主義的な機構をかつぎながらも急速に進展した、日本資本主義全体の構造把握から出発せねばならない。本書は経済的な事柄に多くの注意を払っているけれども、最初のファシズムの定義にも見られるように、帝国主義とファシズムが並列されたりして、その関連の把握が弱い。だから経済的な説明はアクセサリとなっ

て、全体としては政治史という印象を強く受ける。斎藤内閣が挙国一致内閣であったり(七七頁)、近衛は全ての上ののっていたり(一四頁)、ブルジョアジーの軍隊が国民の軍隊であったり(二八頁)、労働者や農民、組織を欠いた一般庶民の動きなどは閑却されているかのようである。ブルジョアジーと一口に云っても、その部門、規模その他によってファシズムの推進、受容のしかたはまことに多様なもので、どのような層が、どのような理由で、どのような手段でファシズムを進めたかという問題は多く今後の研究に残されているといえよう。

さらに慾を云えば、ファシズム以前の国粹主義、国権主義、ナシヨナリズム、自由民権運動などとのつながりも知りたいし、声なき庶民の戦争協力の社会心理学的な考察、反ファシズム闘争史、さらに戦後の分析なども著者に期待したい。本書は丹念な資料としても貴重な価値をもっている。昭和二年第二次共産党再建(大正一五年、三一頁)、日本社会主義者同盟(↓日本社会主義同盟、二二、二四頁)などの誤植が惜しまれる。

(河出書房新社、A5・三四四頁、六五〇円)